

ふるさと納税使い道通信 ダイジェスト版

皆さんのご寄附で
生まれた変化
“まちの今”を
ご紹介します。

Use
01

飛騨市みやがわ考古民俗館の活用支援

旧中村家再生プロジェクト

なぜ今「茅葺き民家」を守るのか？

飛騨の山あい、飛騨みやがわ考古民俗館に佇む一軒の茅葺き民家「旧中村家」。静かな時を刻んできたこの家は、一五〇年もの間、風雪に耐えながら地域の暮らしと文化を支えてきました。しかし、土台が傾き、屋根がいたむなどの老朽化が著しく、修復の時期を迎えていました。かつて飛騨一帯で多く見られた茅葺き合掌造り民家。「旧中村家」は今や飛騨市宮川町に唯一残るものです。明治初期に建てられたもので、当時の典型的な農家建築と位置付けられ、市の文化財（有形文化財・建造物）に指定されています。しかし、現状

はさまざまな課題を抱えています。

- ・傷みが激しく、茅葺き屋根が崩れかけている
- ・地域の博物館「飛騨みやがわ考古民俗館」は年間三十日しか開館できていない
- ・地域の人口減少に伴い、「伝える人がいなくなる」

「このままでは飛騨の文化が失われてしまう」。だからこそ、私たちは「旧中村家」を文化財としてただ修復するだけでなく、人々が集い、つながる場所として再生させるプロジェクトを立ち上げました！

傾いた基礎を修復、再び元の位置に



ひきや 曳家

今ではなかなか見ることのない大変珍しい工法「曳家（ひきや）」——建物を解体せず、そのまま横方向へゆっくり移動させる技術を用いて、2024年9月にはおよそ70トンの建物をアリが歩くより遅い速度で、約40メートル慎重に移動させました。その間に、傾いていた基礎の修復を実施し、同年11月には、建物は元の位置に戻り水平を取り戻したところで第一期工事が無事完了となりました。腐食した床材や柱も補強・交換され、柱が真っ直ぐに、ふすまや障子などの建具もスムーズに開け閉めできるようになり、建物は息を吹き返しました！



崩れゆく民家から人が集う場所へ

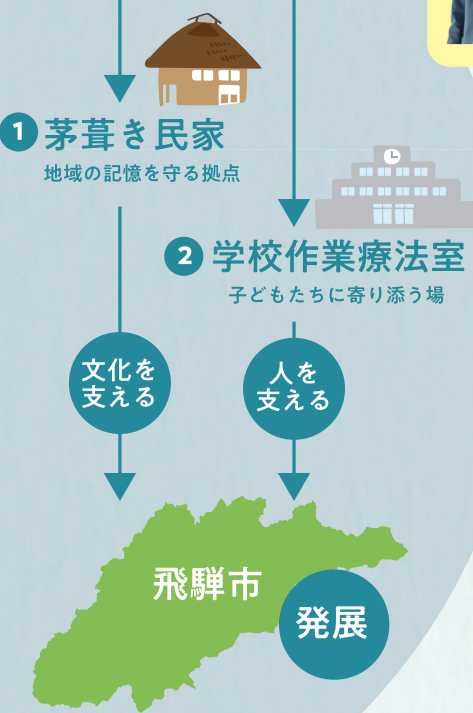


ただの「修復」で終わらない、茅葺き民家を、未来に継承し交流拠点にしたい！——この想いを支えるのは、ファンの方々の声。「囲炉裏で鮎を焼く体験ができれば」「修復の過程をみんなで学びたい」「3Dスキャンができれば面白そう！」など多くの方がこの民家の保全・活動を望んでいます。150年の歴史が息づく茅葺き民家を、市内外の方が交流する拠点とし、「過去」から継承されてきた文化財を「今」を生きる私たちが「未来」へと繋ぎ、交流の場としてこの貴重な文化財を守るために取り組んでいます。

■修復への想いと活用への展望

- 2026年度：準備開始
 - 2027年度：茅の購入、葺き替えに向け屋根の調査・設計
 - 2028年度：葺き替えの実施
 - 2029年度以降：文化体験・交流の場として運営
- 修復後は民具使用や石棒作り体験など、飛騨文化を学べるワークショップなどを計画しています

ふるさと納税でいただいたご支援



飛騨市教育委員会 三好学芸員からのコメント



修復前より囲炉裏で鮎を焼いて食べたりするイベントをしていましたが、沢山の応援で、修復は大切な文化財を次世代に伝えと共に、皆さんが心寄せる場の整備としても大切だと認識しました。このため、今後は茅葺き屋根の葺き替えを行い、訪れるすべての人に「飛騨の暮らしのぬくもり」を伝えていきたいと思っています。また、飛騨市のような過疎地においては、多くの方の応援が自分たちの文化を継承していく力になっています。それは、飛騨市の文化を守ること、全国の過疎地に勇気を与えることにもなっています。引き続き皆さんのご支援を何卒よろしくお願いいたします。

「学校作業療法室」とは



市内に拠点のあるNPO法人はびりす（大垣市）に委託し、2023（令和5）年度より市内の小中学校全8校を対象に、身体と心のリハビリ専門家である「作業療法士（OT）」が定期的に滞在する部屋を学校内に設置。子どもたちの学習や生活の困りごとに寄り添う取り組みを行っています。この取り組みはOTが月に2回、各校を訪問・専用の部屋に日中滞在するもので、子どもが生き生きと学校生活を送るサポートをしています。

飛騨市が気づいた「学校にもう一つの保健室」の必要性



少子化が進んでいる一方で、学校の現場では、子どもたち一人ひとりが抱える課題が多様化しています。不登校や行き渋り、発達障がい、学びや日常生活のつまずき…。岐阜県の児童の相談内容をみても、障がいや養護、育成には当てはまらない「その他」の相談件数が増加傾向にあります。

現場の教員は、たくさんの業務がある中で子どもたちを支えてきましたが、対応に悩み限界を感じることもありました。そこで、生活をしやすい専門家である作業療法士の支援を導入したところ、教員からは「子どもたちの見方が変わった」「むずかしく感じていた子への接し方がわかった」「子どもたちの変化を実感した」など、前向きな声が聞かれるようになりました。

こうした変化を通して、学習や心身のケアを行う従来の保健室とは別に、子どもの「日常の困りごと」に寄り添うもう一つの保健室が必要となっています。

学校教員からのコメント



子ども一人ひとりの困りごとや不安がどこに起因しているのかを専門的な視点で見てもらうことで、教員の負担が軽減しています。子どもたちのやりたいこと、できるようにしたいことを引き出し、「できるようになった！」と実感できるまできめ細やかにサポートしていただいています。学校教員とは異なる専門的な見地からの子どもや保護者、家族へのアプローチは教員らの学びにもつながっています。

学校作業療法を学ぶ三宅さんからのコメント



飛騨市での「学校作業療法室」の取り組みは福祉と教育の連携があってこそ。作業療法士がこんなに地域や社会になじんでいるところは全国を見渡しても飛騨市しかないと思います。学校現場での作業療法を充実させ、人材育成のマニュアルやツール、ノウハウを全国に広げることで、困りごとのある子どもや保護者の役に立ちたいです。

学校現場で個性に寄り添うサポート

Use
02

先駆的なことも真ん中支援の実践

日本初「学校作業療法室」の人材育成モデル確立へ



鉛筆を上手に持てない子

遊びながら手の力を育てる
トレーニング

椅子に座るのが苦手な子

バランスボールや
姿勢改善の指導

友だちとうまく遊べない子

社会性を育む
グループワークなど

子どもたちが自身が「できた！」

という経験を積み重ねることで、
自信を取り戻し、楽しく学校に通い、
健やかに生活できるようになる。

飛騨市では、全国で初めて、小中学校に作業療法士（OT）を配置する「学校作業療法室」の取り組みを進めています。現在は、市内すべての小中学校に設置され、子どもたちの学習や生活の困りごとに寄り添う支援を行っています。「生活」に焦点をあてて、児童生徒のたてた目標を達成するためのアプローチ等の作戦を一緒に考える活動の他にもそれぞれの子どもたちの個性に寄り添ってサポートしていきます。